

直島への手紙 第一信

前略 大岸 様

お盆が過ぎ、9月にもなったのに、相も変わらず暑い日が続きますが、お元気でしょうか？ 展示「直島群島の生きる知恵に学ぶ」は、無事、初日を迎えました。

今日は、私たちと直島との縁を振り返り、展示に至った流れをお話したいと思います。

2002年(平成14)9月、私は横浦遺跡の発掘調査で初めて、直島を訪れました。家プロジェクトが進行中でしたが、まだ「アートの島」という強いインパクトは感じられませんでした。瀬戸内海に浮かぶ、普通の島。そんな印象でした。

県道の建設工事で発見された石の構造物は、平安時代終わり頃(12世紀)から戦国時代(16世紀)に至る、港の護岸や荷揚げ場の痕跡であることが分かりました。1996年(平成8)の暮れ、高松駅前の再開発に伴う発掘調査で、同じように板石を敷き詰めた荷揚げ場の跡を調査していた経験が、役に立ったのを覚えています。

一緒に発掘された中世の土器・陶磁器には、讃岐のものもありましたが、備前産や播磨産、さらには中国宋・元時代の白磁もあり、この場所が多方面に開かれた港町だったことを思い起こさせました。

遺跡を見下ろす丘の上には、崇徳天皇神社があり、直島に一時滞在したともされる崇徳上皇も、この港で上陸したかもしれない。そんなふうに想像して、ドキドキしたことを思い出します。

2018年(平成30)、本村地区を何度か歩きました。もう押しも押されぬ「アートの島」になって、多くの方々が島を訪れていました。Gパンに作業服でフェリーに乗るのは、少々勇気がいったように記憶しています。

なぜ、本村を歩いたのか。それは、本村の集落景観が、実は谷筋を通過して吹き下ろしてくる風を受け渡す仕組みになっている、という建築家・三分一博志さんの鋭い分析を知っ

たからです。伝統的な家屋と敷地が、そのようなエコ・システムの上に成り立っているという見解に刺激を受け、遺跡や寺社、石塔などのモノから、それとの関わりを見つけることはできないか。そう考え、本村を歩きまわったのですが、モノとモノとのつながりを柔軟に考えることができず、途方に暮れるばかりでした。

その後も年に何回か直島を歩き、今に至りました。

大岸さんと知り合うことができたのは、私たちにとって幸運でした。いろいろな方をご紹介していただき、それぞれから80年近い人生の記憶をお聞きすることができたのは、得難い経験です。

島の方からうかがったお話しは、ここで日々を送ってきた生活の知恵の宝庫だと思いました。私たちは、島の人たちの記憶・語りから、ここで生きていくための知恵を学ばせてもらっていたのです。

島内を歩きまわり、見てきた民家・寺社・石塔・土器片、そして地形や海は、人々の知恵のもとに見直すことだ大切だと気づきました。

私が特にびっくりしたのは、「親父が伝馬舟を漕いで葛島に渡り、そこで田んぼをしていた」というお話しでした。小さな無人島で、なぜ、どのように稲作をしていたのか、という疑問と興味がわいてきたのを覚えています。

直島本島の周辺に点在する、小さな有人島・無人島へと、関心の範囲が広がりました。以後、島々に上陸し、歩きまわるミッションが続いています。その成果の一部は、先日、直島町の方々へお配りした『直島野帖 Vol.1』でご紹介しています。「第2号はいつ出るのか？」といった声もあるとお聞きしました。ありがたいことです。鋭意、準備しています。

大岸さん、直島からまだまだ学びたいことが、いっぱいあります。そして、学んで考えたことを、今度は多くの方々に伝えたい。ですからまた、お手紙書かせていただきます。しばらくお付き合いください。

早々

四国村落遺跡研究会 佐藤竜馬 拝



お話をたっぷり聞く



夏の荒神島で、ヘトヘト